

令和7年3月25日
世田谷区立尾山台小学校
校長 小田 正弥

令和6年度 自己評価報告書

令和6年度、本校では自己評価として、大項目として7項目、

- I 重点目標
- II 指導の重点
- III 教育課程
- IV 指導計画
- V 生活指導
- VI その他

について振り返りを行い、次年度に向けた改善点を検討し、教職員で共通理解を図っています。
この他、保護者や児童の学校評価とほぼ同じ設問となる自己評価を行っています。

保護者、児童、教員では主語や言葉の使い方が異なるので、

- ・わたしは、自分のよいところや得意なことがわかっている。(児童)
- ・子どもは、自分のよいところや得意なことがわかっている。(保護者)
- ・わたしは、子どもたちが自分のよいところや得意なことをわからうとする指導をしている。
(教員)

このように、多少設問の文章は異なりますが、同じ内容を視点が違う3者が回答している設問が25問あります。児童が自分の実感を、保護者が自分の子どもの実感を回答するのに対し、教員は実際にできているかどうかの実感ではなく、指導をしているかどうかの実感の回答となっていることは大きな違いであり、結果にも表れていると考えられます。

この中で、児童、教員は8割以上の肯定的評価で、保護者の肯定的評価が8割に達しない項目が3項目あります。

- ・わたしは、学校のきまりを守って、行動している。(3年以上児童 91%)
- ・本校は、学校での過ごし方やルールについて子どもに考え方させる指導をしている。(保護者 78%)
- ・わたしは、学校での過ごし方やルールについて子どもたちに考え方させる指導をしている。(教員 97%)
- ・目標をもち、その実現に向けて努力している。(3年以上児童 90%)

- ・本校の教員は、子どもに目標をもたせ、その実現のために支援している。(保護者 67%)
- ・わたしは、子どもたちに目標をもたせ、その実現のために支援している。(教員 100%)
- ・自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある。(3年以上児童 91%)
- ・本校は、子どもの生き方や将来のことについて考える授業をしている。(保護者 57%)
- ・わたしは、子どもたちの生き方や将来のことについて考える授業をしている。(教員 87%)

この項目について、保護者の感じ方はあまりできていない、よくわからない、というものであることがわかります。保護者の皆様に伝わる指導をすることや、今行っている指導を伝えていくことで、安心いただけるものと考えています。

児童の肯定的評価が90%と高いのに、教員、保護者は低い項目があります。

- ・わたしは、家庭で宿題やe-ラーニングでの学習をしている。(3年以上児童 90%)
- ・子どもは、家庭で自主的に学習をしている。(保護者 62%)
- ・わたしの学級の(わたしの授業を受ける)こどもたちは、家庭で自主的に学習をしている。(教員 61%)

この項目については、子どもたちは勉強しているつもりでいる、宿題など最低限やらなければいけない学習はやっている、と思っている子が多く、実際にほとんどの児童がその通りなのだと思います。しかし、保護者としてはもっと勉強してほしいという期待が常にあることはわかります。教員としては宿題の提出が全員そろわない、という事実から、個ではなく全体としては家で勉強しているとは感じられないでしょう。それがこの数値に表れていると思われます。子どもと大人の間の永遠のテーマなのかもしれません。

教員は8割以上の肯定的評価で、保護者、児童の肯定的評価が8割に達しない項目が2項目あります。

- ・わたしは、誰かを支えていると思う。(全児童 69%)
- ・子どもは、誰かを支えて行動していると思う。(保護者 74%)
- ・わたしは、子どもたちが誰かを支えようとするように指導している。(教員 100%)

この項目について、教員は100%という高い数値を示しています。本校はキャリア教育を推進しており、人と人とがつながる力についても力を入れて指導をしています。誰かを支える、ということについて、教員は実感として、指導をしている、と感じていることが分かります。しかし、児童、保護者にとっては、何をしたら誰かを支えていることになるのかよくわからない、ということがこの結果からわかります。これは学校として大きな反省点としてとらえ、児童にも保護者にも伝わる指導に改善していく必要があります。また、今回の学校評価は学級ごとの結果をそれぞれの教員が自己反省のために振り返っています。教員の結果、保護者の結果、児童の結果に違いがある項目は学級ごとに異なります。学級ごとにその違いの原因を探り、差を埋めていこうとする作業が、

よりよい学校への道と考えています。

- ・わたしは、本を読むことが好きです。(全児童 78%)
- ・子どもは、本を読むことが好きである。(保護者 65%)
- ・わたしは、子どもたちが本を読むことが好きになるように指導している。(教員 90%)

読書については昨年から校長が力を入れている項目となります。児童も保護者も教員もすべて肯定的数値は昨年度より上がっていますが、客観的にみると、大幅な増加、というよりは、誤差の範囲の増加と思えるわずかな増加です。ただ、教室を見回ると、図書室での読書の活動の時間、学級で全体で読書をしている時間、学級で課題が早く終わった児童が読書をしている姿は確実に昨年よりも見かける時間が増えています。まずは子どもたちが、読書も楽しいな、読書をしよう、と思えるよう、来年度も様々な方策を考えていきます。